



こんぴらさん障壁画の謎

—若沖・岸岱をめぐって—

【第5章】

宥存

[宝暦11年(1761)2月18日入院～天明7年(1787)10月8日遷化]

讃岐に鎮座する金毘羅大権現の奥書院障壁画を、なぜ京の画家である伊藤若沖が描くことになったのであろうか。

金毘羅の歴史に精通し当宮図書館に勤務した松原秀明氏によると、金毘羅大権現第10代別当である宥存は元文4年(1739)京都に生まれ育ち生来絵事を好んだので若沖について学んだという¹。

宥存は京都二条城の与力を勤めた柳下忠次良貞常(第8代別当宥山の弟)の息男として元文4年(1739)11月26日生まれた。俗名を山下弁之進といい、宝暦5年(1755)5月1日、後住に決まり名を亀丸と改める。宝暦5年(1755)9月21日、得度。猶父は姉小路大納言公文。宝暦11年(1761)2月18日金光院入院。實道房と称し、眠山、如獅、巴桐などと号した。画を能くす。天明7年(1787)10月8日49歳で遷化した²。



伝円山応挙筆 宥存尊師御影(琴陵家蔵)



神社の史料に残る宥存の事項に若沖のことは記されず、山下家の家譜にそのような記述があるのか松原氏に確認できない今となっては定かではない。宥存と若沖の関係は詳らかではないが、若沖に師事したという関係性から、宝暦11年(1761)に宥存が金毘羅大権現別当に就任したことを契機として障壁画制作が依頼されたのだらう。

明和元年(1764)というと、《動植綵絵》の制作最中である。しかし、かつての教え子が立派な社僧となった喜びとお祝いの気持ちもあり、引き受けたのではないだろうか。

『讃岐画家人物誌』に「僧 宥存 琴平金光院ノ住職画ヲ狩野氏ニ学フ」と記され、『金刀比羅宮応挙画集』は宥存について「絵画を嗜み、自らも狩野風の絵を能くし、其描ける百鬼夜行絵巻摸本、蕭湘八景図、鶏図、鷹図等現存す。」と記す。土居氏は宥存筆《鷹図》を見て「画技はなかなか達者であり、鷹の写実感豊かな描写も素人の域を脱している。そして色彩や構図法には、いかにも若沖の門人らしい装飾的特色が看取されるのである³。」と述べている。伊藤氏も「完璧にプロフェッショナルな技術力とは言い難いものの土居氏も言うように素人の域は完全に超えている⁴」と評し、止まり木は伝徽宗《白鷹図》(金刀比羅宮蔵)に依拠して描いていることを指摘している。

京の文化に精通し自ら絵事を嗜んだ宥存は障壁画制作を思い立つ。別当就任直後に自らの館である奥書院は師である若沖に依頼し、晩年、公的な施設である表書院は応挙に依頼した。先述した通り、文書による記録で書院障壁画の主題継承が確認できるのは、現在のところ宥存が別当に就任してからであり、テーマヘリティッジは宥存が考え出した慣習であるかもしれない。

ちなみに、今の旭社(旧金堂)は、明和8年(1771)に宥存が建立を計画し、74年後の弘化2年(1845)第18代別当宥黙の時代に落成したことから、いかに大事業であったかが窺える。

伝円山応挙筆《宥存尊師御影》が琴陵家に伝わる。



宥存筆 鷹図



伝徽宗筆 白鷹図



旭社(旧金堂)

- ¹ ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』p.19
『金刀比羅宮史料』8巻「文化十年金光院日帳」(六月二十日条)に歴代別当の出生が記され、宥存は京都出生とある。
- ² 『金刀比羅宮史料』33巻「安政六年未八月日雑事御用留」の記事
『金刀比羅宮史料』□巻「金光院宥存」の記事
- ④『町史ことひら 2 近世・近代・現代 史料編』p.275『多聞院日記抜書 前・後』宝暦五亥年之部に
五月朔日
一山下弁之丈殿御後住二御究被遊候事
但御名亀丸様与御改被遊候
(朱書)
「宥存様之御事ナリ」
と記される。
- ³ ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』p.19
- ⁴ ⑤『金刀比羅宮の名宝—絵画』解説p.347

参考文献

- ①松原竹坡『讃岐画家人物誌』香川新報社、1913
- ②『金刀比羅宮応挙画集』金刀比羅宮社務所第一課、1935
- ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』1046、pp.11-20、1981
- ④『町史ことひら 2 近世・近代・現代 史料編』琴平町、1997
- ⑤『金刀比羅宮の名宝—絵画』金刀比羅宮、2004